

目標は常に「全国制覇」！

伝統のコンビバレーで

頂点を目指す



今年1月の春高バレーで準優勝に輝いた鹿児島商業高校バレーボール部の選手たち

鹿児島商業高等学校
バレーボール部監督
とくしげ かずあき
徳重 一昭さん

略 歴

昭和45年薩摩川内市生まれ。日本体育大学を卒業後、鹿児島県で体育教諭に。奄美大島の宇検中学校や南指宿中学校での勤務を経て、平成25年4月から、鹿児島商業高等学校に赴任し、バレーボール部監督に就任。

「春高バレー」の愛称で親しまれている全日本バレーボール高等学校選手権大会は、バレーボールの甲子園とも言われ、全国の高校生がその頂点を目指して、日々練習に励んでいる。
鹿児島商業高校は7年連続で鹿児島県代表としてこの春高バレーに出場。昨年までは2年連続で、惜しくも準決勝敗退に終わったが、今年1月に行われた大会で、男子の鹿児島県勢としては初の決勝に進出した。

CloseUp

クローズアップ

「春高バレー」で

鹿児島県勢男子初の準優勝

6センチメートル。これは準決勝で対戦した秋田県の雄物川^{おのものがわ}高校と鹿児島商業高校との平均身長^{おのものがわ}の差だ。スパイクやブロックなど高さが強力な武器になるバレーボールだが、高さでは相手に及ばない鹿児島商業高校の選手たちは、速攻や時間差といった伝統のコンビ攻撃でこの身長差を見事に埋めて、決勝進出を決めた。

決勝では、昨年、同大会で優勝している愛知県の星城高校と対戦。ストリート負けではあったが、センター黒瀬選手の速攻やライト津田選手のバックアタックなど、持ち味のコンビ攻撃が輝きを放った。

常勝チームを築いた前任の田代博明監督から引き継いで、昨年4月からこのチームを率い、鹿児島県勢初の準優勝に導いた徳重一昭監督は「優勝を目標に望んだ大会で、残念ながらその目標



にはたどりつけませんでした。監督が変わるといって大きな変化があった中で、3年生や前任の田代監督の協力も得ながら、強いチームを作ることができました。みんながそれぞれの役割をしっかりと果たし、伝統のコンビバレーは十分全国に通用したと思っています」と今年の大会を振り返った。

今につながる中学校でのバレーボール指導

徳重監督がバレーボールを始めたのは中学生のとき。その頃から体育の先生になりたいとも思っていた。

大学卒業後、その夢をかなえて鹿児島で体育教諭になり、中学校で教鞭をとった。平成14年に奄美大島の宇検中学校に赴任したときには、当時小学校にバレーボール部がなかった宇検村で、少しでも早くからバレーボールができる環境をと、ジュニアチームを作って指導に当たり、奄美地域での選手層のレベルアップにも取り組んだ。また、次に赴任した南指宿中学校では県大会を初制覇するなど、数々のチームをレベルアップさせてきた。

「鹿児島商業高校は全国トップレベルでしたから、中学校ではそれをモデルにしながら、高校で通用するように選手たちを育成してきました」

昨年度にキャプテンを務めた清田選手は南指宿中学校で優勝したときのメンバー。また、現在も活躍している津田選手は、宇検村のジュニアチームでバレーボールを始めたメンバーの1人であるなど、今につながる指導を重ねてきた。

「考える力」を持った選手になつてほしい

徳重監督が日頃の練習で重視しているのは「考える力」を養うことだ。ただ監督の指示を聞いてプレーするのではなく、監督からの「提案」を選択自身が考え、消化して自分のものにしていく。そのことで、相手のプレースタイルや自分たちのチームの状況など、さまざまな状況に応じた最善のプレーができるのだ。



そのため、普段から選手とのコミュニケーションをとることも大切にしている。徳重監督だが、「生徒たちには生活態度や礼儀をはじめ、社会人として日常生活の中でも大切なこと、いわば『人間力』を身につけていって欲しい」と、教師としての顔も忘れない。

徳重監督のもとで培われた「考える力」と「人間力」が、これまでのコンビバレーに加わることで、チームに新たな強さが生まれている。

「挑戦」を忘れない

「自分自身、選手としては全国大会での出場機会がありませんでした。指導者となった今は、子どもたちにそういう場を経験させてあげられるよう頑張りたいと思っています。ですから、どんな大会でも常に優勝、そして全国制覇を目標にしています」と語る徳重監督の座右の銘は「挑戦」。県内で常にトップレベルにあるチームだが、常に「全国制覇」という高い目標を掲げることで、決しておろそかになく、前に向かって、足元をしっかりと固める努力をすることの大切さを、生徒たちに訴えかけている。

「もちろん来年も全国制覇が目標です。また、6年後には国体が鹿児島で開催されます。そのときも鹿児島商業高校を中心に全国優勝を目指したい」

時に厳しく、そして温かく生徒を見守る徳重監督の視線の先には、常に日本の頂点がある。